

アンデス文明概説

東海大学文学部文明学科 吉田 晃章 准教授

高度で異なる自然環境

アメリカ大陸に渡った人々は、少なくとも今から1万1千年前にはアンデス地域に到達していたとされる。彼らは狩猟と採集を生業としており、氷河期の終わりとともに環境が変化し、それまでの大型動物の狩猟から、小型動物の狩猟に移行していった。シカやラクダ科動物などを追う狩猟採集民がアンデスで目にしたのは高度によって多様な環境であった。大きく区分すると、乾燥した海岸地域（コスタ）、比較的湿潤な山岳地域（シエラ）、東斜面の熱帯地域（モンタニャ）に分けられるが、ハビエル・プルガル・ビダル (Javier Pulgar Vidal 1981) はアンデスの自然環境をさらに細分している。乾燥したチャラと呼ばれる海岸地帯の環境では、主に河川が太平洋にそそぐ流域のみで生活が可能であり、その他の海岸地域では寒流による砂漠が広がり居住が困難である。海岸の文化はこの河川流域で栄えた。標高500mから2300mにかけてはユンガ地帯が広がる。ユンガでは年平均気温が18度程度で温暖で果樹やサツマイモ、サトウキビなどが育つが、風土病もある。ケチュア(ケチュア)と呼ばれる2300mから3500mの山間盆地になると比較的平均気温は下がるが、いままジャガイモやトウモロコシの栽培がさかんに行われている地域である。ケチュアは、ケチュア語やケチュア族のように民族や言語をさす言葉にもなっており、高地の文化が栄えた場所である。インカの都クスコも、約3400mの高地でケチュア地帯に位置している。

3500mから4000mにかけては、スニと呼ばれる冷涼な地帯が広がり、根菜類と雑穀のキヌアしか育たない。さらに4000mから4800mの高原地帯であるプーナではジャガイモ栽培に加えリヤマ、アルパカなどの家畜が飼育されている(写真1)。これ以上の高地はハンカと呼ばれ、雪をいただく山岳地域となり、人の居住は困難になる。アンデスの東斜面では、400mから1000mのルパルパや400m以下の低地オマグアなど熱帯気候のジャングルが広がっている。狩猟採集民であった彼らは、高度による環境の変化を徐々にまた巧みに利用しながらアンデス文明を形成していく。



写真1 プーナのアルパカの群れ

アンデス文明の形成

紀元前5000年頃(古期)になると、中央アンデスでは、植物栽培や動物の家畜化が始まり、紀元前2500年頃には定住村落が営まれるようになった。農耕における定住よりも海岸部における漁労定住を考えると定住の歴史はさらにさかのぼることができるだろう。アンデスにおける栽培作物は、トウモロコシ、カボチャ、ジャガイモ、サツマイモ、トウガラシ、キヌア(アカザ)、マニオク、トマト、インゲンマメ、リママメなどである。家畜としては、アルパカ、リヤマ、クイ(テンジクネズミ)、イヌ、シチメンチョウなどが飼育された。アンデス文明の歴史は、旧大陸の四大文明に比べ、これまでさほど古くないと思われてきた。しかし、太平洋岸のカラル遺跡の発掘調査によって、アンデス文明の起源は、紀元前3000年から2500年頃まで遡ることが

できるようになった(写真2)。ルス・シャディ(Ruth Shady 2004)が調査したこの遺跡は、海岸部から約20kmのスーペ川沿いに位置し、周囲には耕作地が広がっている。



写真2 カラル遺跡(中央ピラミッド)

遺跡には、大型の祭祀建造物が 30 以上も立ち並び、神殿に付随する円形の広場や神殿に囲まれた方形の広場が作られた。円形広場からは、鳥の骨を利用した笛などが多数出土しており、神殿における当時の人々の活動が理解できる。またピラミッド状の神殿上部では、火を焚く儀礼が行われていた痕跡が炉から判明している。しかしながら、土器は確認されておらず、先土器期の遺跡であることが分かっている。カラルの人々の暮らしも、調査により徐々に解明されつつある。彼らは綿を栽培し、海から運ばれてくる魚も食べていた。綿の実やカタクチイワシなどの骨も多数出土し、そのことを物語っている。このような状況から綿花は漁網を作るために栽培され、海岸部と盛んに交

易がなされていた様子がうかがえる。網の製作により漁獲高があがり、人々の生活が豊かになり、さらなる生産と人口の増大をもたらしたのであろう。戦争などの痕跡は発見されておらず、文明形成の要因として、アンデス地域では農耕はもちろんのこと信仰や交易が重要な役割を果たしていたことが窺える。ほかにもキープやパンパイプなど後世に様々な影響を与えたと思われる文化現象の始まりを見て取ることができる。カラル遺跡の調査からアンデスにおける文明の起源は数百年早まり、旧大陸の文明と同じくらい古いものであることがわかってきた。紀元前 1800 年頃にカラル遺跡は、乾燥化により砂で覆われ放棄され、大型センターの建設は川の上・中流域に移っていった。

アンデス一帯に広がるネコ科動物の表象

土器が利用される時代になり、アンデス各地に大規模な神殿が建立され、ネコ科動物、ワシ（猛禽類）、ヘビ、ワニなどの動物の特徴を組み合わせたチャビン様式と呼ばれる表現様式が前 1400 年から 400 年にかけて中央アンデス一帯に広まった。この様式は、土器、石彫、織物、金細工など様々な媒体に表現された。代表的な遺跡は、北高地の南部のチャビン・デ・ワンタルである（写真3）。このチャビン・デ・ワンタル遺跡では、ネコ科動物と人間やワシを組み合わせたチャビン様式の図像が石彫や土器などに顕著に認められる。神像を描いたチャビン様式の布なども存在した。布や持ち運びのできる土器などで、急激に図像表現がアンデス一帯に広まったのだろう。神殿の石彫からは、男女の対称性や、丸や四角の対称性など二項対立が意識される時代となっていたことが分かる。土器でもチャビン様式が広まり、海岸では海岸のチャビン様式と言われるクビスニケ様式が発展し、黒色土器を中心に制作されるが赤色土器もみられる。鏡型壺がみられ

るようになるのもこのころである。形成期末には、トウモロコシの栽培化やラクダ科動物の飼育などで社会変化が生じ、チャビン・デ・ワンタルのような従来の大型祭祀センターは放棄されたようだ。その後、地方の文化が開花する。



写真3 チャビン・デ・ワンタル遺跡

栄える地方文化



写真4 モチェ遺跡（太陽の神殿）

北海岸ではモチェ、南海岸ではナスカ、中央高地ではレクアイなどの文化が栄える。この時期は地方発展期（紀元前後～700年）と呼ばれ、社会の階層化が顕著になり、専門的な職業集団も生まれた時期と考えられている。また、著しい人口増加とともに耕地が拡大された。そのため灌漑施設の整備に多くの労働力が必要となった。水路で

は、最も長いものは総延長で数十キロにも及ぶものもある。このような大規模な土木工事を行うためには、中央集権的な権力の存在が当然必要であり、地方発展期に興る政体の中には、初期国家と呼べるようなものも現れる。建造物や遺物にも以前とは異なる特徴が見てとれる。

モチェ川とチカマ川の両河谷を中心に栄えたモチェ文化の中心的な遺跡は、太陽の神殿 (Huaca del Sol) と月の神殿 (Huaca de la Luna) である。太陽の神殿は、幅 342m、奥行 159m、高さ 40m の建造物で、8 期にわたり増築されている (写真 4)。後 100 年頃には建築が開始されており、マイケル・モズリーらの推計によれば 1 億 4300 万個の日干しレンガが使用された巨大な公共建造物である (Hastings and Moseley 1975)。一方月の神殿は、自然の丘を利用して建てられた建造物で、幅 95m、奥行 85m、高さ 20m と太陽の神殿よりもやや小さいが、太陽の神殿よりも早く建築が始まった可能性が高い。頂上部

この神殿からは、生贄と思われる遺体が何体も発見されており、神に対し生贄をささげる習慣があったことが分かっている。モチェの人々は近隣の諸部族との紛争により生贄にする捕虜を獲得していた。政治的・軍事的なリーダーがいたことは確かであり、強力な権力をもつ指導者が存在し、労働力を投下し、神殿建設や灌漑にあたらせたのだろう。墓からは貴族や職人の存在も確認されており、チャピンの時代とくらべ、社会の階層化がかなり進展している様子がうかがえる。灌漑による集約的農耕でより多くの人々を賄う食糧が得られるようになり、人口も増大したことは容易に想像できる。土器ではクリーム地、または白地赤彩土器が頻りに作られるようになる。またモチェの南の政体を中心に個人が特定できるような人物の頭部を模した人面土器が作られる。さらに死者や目が見えないなどの障害者も象形土器として作られている。土器に細かい絵を描く、細線画土器も多数制作されるようになった。細線画の土器には神話の場面と思われるものが描かれていたが、近年は発掘から細線画の土器に描かれた神のような装飾品を身に着けた人物が墓から出土しており、実在した王様であったのではないかとされている。いずれにせよ、中央集権的な初期国家が形成されていたのだろう。繁栄し拡大したモチェも紀元後 500 年代後半の気候変動と乾燥化により衰退したと考えられる。

モチェと同時代の紀元前後から紀元後約 650 年にか

は、堀で囲まれており、多彩色の壁画が見つまっている。月の神殿は、それらの図像からも神々と関連する儀式が行われていた宗教的な性格の強い空間であったことがうかがえる (写真 5)。



写真 5 月の神殿の壁面装飾路など公共施設の建設

てアンカシュ県のカイェホン・デ・ワイラス地方ではレクアイ文化が栄えた。レクアイ文化は山間部で発達したが、代表的な遺跡には、パシャシュ遺跡やハンク遺跡などがあるが、それ以外の遺跡はあまり知られていない。しかし本学の調査団 [調査団長 松本亮三教授 (松本亮三 2009)] が古代の金山開発に関する調査を同地方で実施し、日本の調査団としてははじめてレクアイの遺跡を発掘調査している。レクアイの土器は、微細な白いカオリンと呼ばれる胎土で製作されており、モチェの細線描画土器に見られるようなテーマが立体的に表現されているものもある。とりわけ鳥、ジャガーなどの動物、人間、超自然的な生き物がモチーフとなっているものが多い。幾何学文様



写真 6 レクアイの装飾杯
(東海大学文明研究所提供)



写真 7 地上絵 (ハチドリ)

も装飾の特徴となっている。レクアイの土器は白地に黒色のネガティブ文様と褐色で彩色されているものが多く見られる（写真6）。土器のほかには、石彫も有名であり、こ

一方地上絵で有名なナスカは、海岸部のナスカ川とイカ川流域に栄えた（写真7）。降水量はほぼ1mm未満で亜熱帯の砂漠であるが、伏流水として流れる地下水をプキオと呼ばれる井戸から汲んで灌漑し、集約的な農業を行っていた。根菜類、豆類、トウモロコシ、トウガラシ、カボチャ、落花生などを栽培するとともに、海産資源を有効に活用していた。政治的指導者と宗教的指導者はわかれておらず、いずれもシャーマンがその役割を担っていた可能性が高い。モチェ文化のように「王墓」が発見されておらず、社会の階層化の様子を示す証拠はあまりない。社会は階層化されていたというよりは、序列のある社会となっていた。王や貴族の存在が窺えない社会で、都市のような機能を持つ大型集落も建設されていなかった。おそらくナスカの

同時代に栄えた北部海岸のモチェ文化や、北部高地のレクアイ文化とは相互に影響を与えることは、ほぼなかった。ナスカでは16色ともいわれる多彩な土器が登場する。初期から中期にかけては、人間の首級をもつ豊穡神と思しき神が描かれる（写真9）。ナスカ中期以降では戦争に関連するテーマが増加したことが窺え、より力の強い世俗的指導者が出現したことが想像される。戦争や軍事的テーマが多く描かれ、豊穡神が姿を消す。紀元後600-700年頃に南部高地に、のちのワリとティワナクとなる強力な新

の点でチャビン文化の伝統を受け継いでいるとも考えられるが、チャビン・デ・ワンタルにみられるような石彫の洗練された技術あるいは表現は見られない。

人々は、複数の地域集団あるいは首長制社会に分かれて暮らしを営んでいたと思われる。ナスカ文化の遺跡としてカワチと呼ばれる大規模な建造物を伴う遺跡があるが、巡礼センターとして考えられている（写真8）。



写真8 カワチ遺跡

興勢力が台頭し、ナスカ文化に影響を与えた。ナスカ文化は、ワリの支配下に入り数十年のうちに消滅した。



写真9 橋型把手付双注口壺（東海大学文明研究所提供）

ワリとティワナクの拡大

南高地では、ティティカカ湖の南岸でティワナク文化が紀元後100年から繁栄しはじめ、紀元後400年から800年にかけてはティティカカ湖盆地に拡大する。その後、ペルー南部、チリ北部からアルゼンチン北西部までティワナクの影響が及ぶが、大きくなったティワナクの支配地域は紀元後1000年までに次第に崩壊していく。文化名称のもとになったティワナク遺跡には、アカパナと呼ばれる建造物、半地下式広場、カラササヤと呼ばれる石壁で囲まれた方

形の基壇状構造物などがあり、これらを取り囲むように堀がめぐらされている（写真10）。島をイメージしたものか、また防御のためであったのかはよくわかっていない。ティティカカ湖畔では、灌漑農業が営まれ、気温の日較差を利用して作る乾燥イモの技術で、イモを長期間保存することができるようになった。山本紀夫によれば、これはティワナクが繁栄する経済的な基盤となった。彼らは温暖なユンガ地域へ拡大していくが、その支配形態は武力を行使し

たものではなかったのではないかとされている。ユンガ地帯に飛び地を作り、発酵酒にするための原料であるトウモロコシなどの作物を手に入れることが目的だったのだろう。運搬には高地での飼育に適したリヤマが荷駄獣として利用されたことは言うまでもない。ティワナコはリヤマを活用し、物流や交易をうまくコントロールすることもできていたのだろう。



写真 10 ティワナク遺跡（半地下式広場とカラササヤ）

一方ペルーではアヤクチョ地方を中心に遅くとも紀元後 750 年頃から 1000 年頃までワリ文化が栄える。ワリ文化とティワナク文化は土器に表現される神々の図像から密接なつながりがあるとされる。ワリ文化はワリ遺跡を中心にペルーの北部、中部、南部の一部に影響を及ぼした。ティワナク同様に各地に影響を残しているが、文化的な影響が軍事的な征服によるものなのか否か、またワリの支配体制がいかなるものであったかなどはいまだに議論が続いている。いずれにせよワリの拡大は、ティワナクと同様に各地の資源を利用するためであったことに相違はないだろう。ワリ遺跡には神殿などの公共建造物が立ち並ぶ 3 km² を超す広大な区域が存在する。居住区域も含めると 15 km² にも及ぶ、広大な都市的空間が作られ、他のワリ遺跡で

も同様の都市的空間が認められる（写真 11）。



写真 11 ワリのピキリャクタ遺跡

都市国家の誕生

海岸部でも 1000 年頃には都市的な空間が作られるようになる。チムーは紀元後 1000 年から 1476 年にかけての地方王国期にモチェ川流域に成立した王国で、ペルー北海岸一帯を支配した。チムーの首都チャンチャンは、現在のトルヒーヨ近郊に位置し、遺跡中心部の面積だけでも約 6 km² あり、総面積は約 25 km² にも達する（写真 12）。遺跡には、シウダデーラと呼ばれる日干しレンガで作られた壁で取り囲まれた区画が存在する。



写真 12 チムーのチャンチャン遺跡

9つのシウダデーラは同じような構造を持っている。シウダデーラの中には、行政用の施設や広場、倉庫が建設されている。またシウダデーラの中には王墓が造られている。チムーの社会はモチェと同様に水路の建設により灌漑を行い集約的な農耕で発展するとともに、それ以前のシカン文化などから引き継がれた高い冶金技術で栄えていた。チムーは遅くとも 13 世紀初めまでに拡大をはじめ、伝説によるとミンチャンサマン王の時代に最大の版図となるが、1476 年にインカに征服された。高い金属加工の技術を持った職人はインカに徴用され、インカに引き継がれた。チムーのほかにも、海岸部ではパチャカマやチャンカイなどの小国が、また高地ではコリヤールパカもインカに吸収されていき、インカは広くアンデス一帯をおおう国家を建設した。その支配地域は現在のエクアドルを含み、本学の大平秀一教授（大平秀一・森下壽典 2013）は長年エクアドルでインカの調査を実施し、インカ支配の実態を解明してきた。

インカ国家



写真 13 コリカンチャ（太陽の神殿）



写真 14 コリカンチャ（内部）

インカはクスコ盆地を中心に栄え、15世紀前半から急速に勢力を拡大していき、アンデス全域をおさめた最後の先住民国家であった。インカの首都はクスコであるが、この町はコリカンチャ（写真 13, 14）を中心にハナン（上）とウリン（下）に空間的に二分され、二つの社会組織によって維持される双分制社会ができあがっていた。さらにそれぞれが二分され、四区画で社会が構成されることも認められた。スペイン人は、タワテンクスーというインカ国家の別称も記している。これは「四つの地方」という意味で、領域も四つの地方に区画されていたことから、社会は分けられるも相互補完的に一つを構成するという概念があったことが理解できよう。広大な国家は総延長 4 万キロに達するともいわれるインカ道で結ばれていた。つまり情報と物流の網の目が全域に張り巡らされていた。タンボまたはタンブと呼ばれる宿場も設けられており、チャスキと呼ばれる飛脚により、多様な情報を迅速に伝えるシステムも構築されていたようだ。また貢納品や賜り物だけでなく、一般的な交易にもこの道が利用されたことだろう。インカは勢力を拡大する過程で各民族が持っていた技術を継承し、発展させていった。キープと呼ばれる縄の結び目で数を数える道具や段々畑、インカ道などはワリの時代から引き継いだともいわれている。精緻な石造建築技術はティワナクなどから、また冶金技術はシカンやチムーからインカへ受け継がれた。このようにアンデス文明の集大成としてのインカ国家も、1532年にペルー北高地で王アタワルパが征服者のフランシスコ・ピサロに捕縛され崩壊することとなる。時の移ろいの中で、支配者は変わり国は滅びるものの、先住民の生活は絶えることなく今も続いている。

[※写真 6,9 以外は筆者撮影]

参考文献

Hastings, C. M., and M. E. Moseley "The adobes of Huaca del Sol and Huaca de la Luna". *American Antiquity* 40:196-203, 1975.

松本亮三「ペルー北高地先史時代の金山開発と文化変化」、科学研究費補助金（基盤研究A）研究成果報告書；平成16年度～平成19年度基盤研究A、東海大学総合研究機構、2009。

大平秀一・森下壽典「エクアドル南部におけるインカ国家の研究：ムユンゴ領域の発掘調査（2011）」、『古代アメリカ』16号、31-42頁、古代アメリカ学会、2013。

Pulgar Vidal, J. *Geografía del Perú: Las ocho regiones naturales del Perú*, Editorial Universo S.A., 1981.

Shady Solis, R. *Caral The City of the Sacred Fire / Caral La Ciudad del Fuego Sagrado*, Inerbnk, 2004.

著者プロフィール

吉田 晃章 1971年神奈川県生まれ。東海大学文学部文学学科卒業後、2003年大学院文学研究科博士課程後期を単位取得満期退学。文学修士。専門は、メキシコやペルーを中心とする中南米先史学。